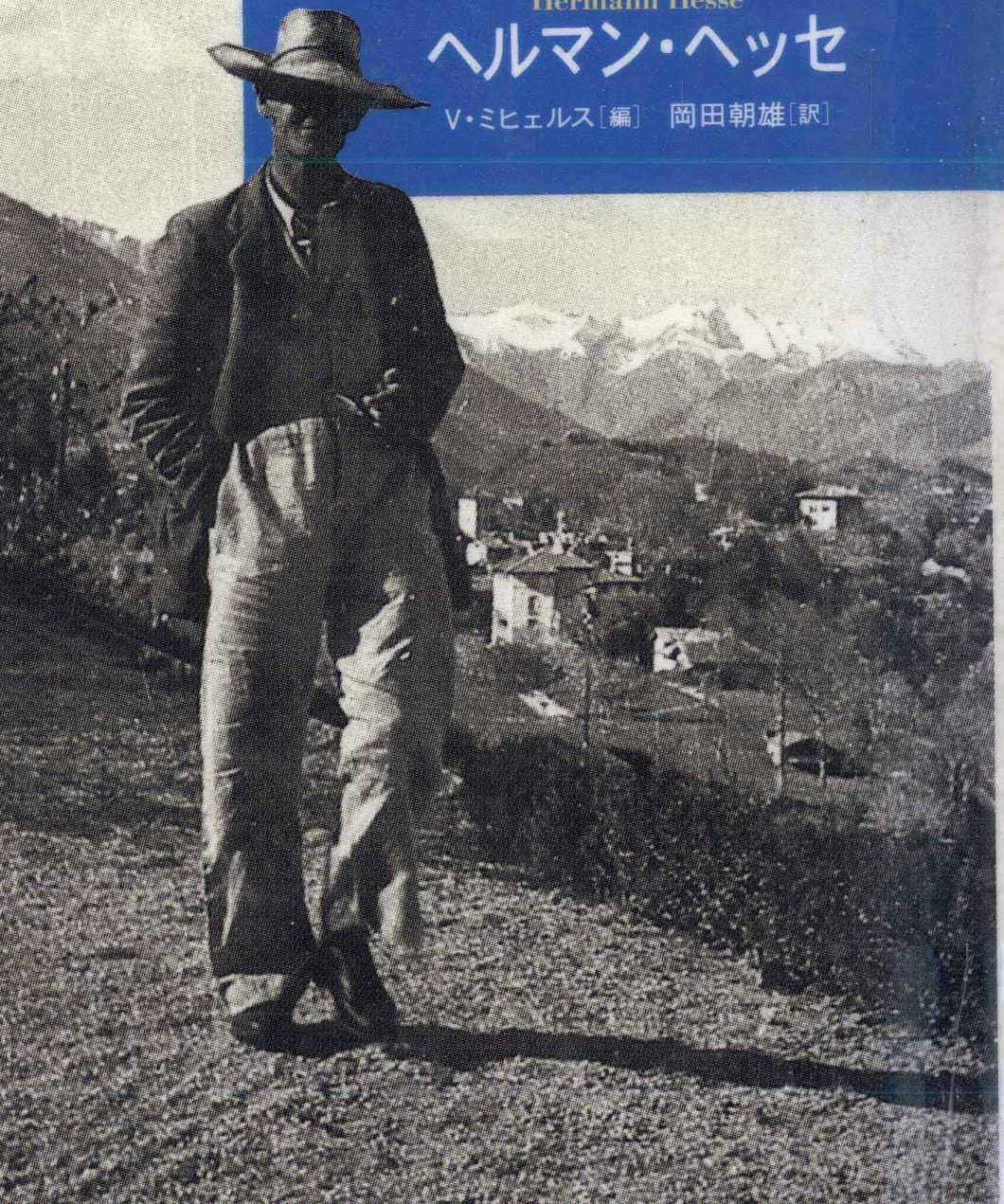
わが心の故郷
アルプス南麓の村

Hermann Hesse

ヘルマン・ヘッセ

V・ミヒェルス［編］　岡田朝雄［訳］



わが心の故郷 アルプス南麓の村

1997 © Soshisha

訳者との申し合わせにより検印廃止

1997年12月25日　第1刷発行
1998年1月12日　第2刷発行

著　者　ヘルマン・ヘッセ
編　者　フォルカー・ミヒェルス
訳　者　岡田朝雄
装幀者　本山吉晴
発行者　加瀬昌男
発行所　株式会社　草　思　社
〒150　東京都渋谷区神宮前 4-26-26
電 話　営業 03(3470)6565　編集 03(3470)6566
振 替　00170-9-23552
印　刷　株式会社精興社
カバー　株式会社大竹美術
製　本　大口製本印刷株式会社
ISBN 4-7942-0794-8
Printed in Japan

わが心の故郷
アルプス南麓の村

Hermann Hesse

ヘルマン・ヘッセ

V・ミヒェルス[編]　岡田朝雄[訳]

苏工业学院图书馆
藏书章

草思社

HERMANN HESSE

TESSIN

Betrachtungen, Gedichte und Aquarelle des Autores.

Herausgegeben und mit einem Nachwort

versehen von Volker Michels

©Suhrkamp Verlag Frankfurt am Main 1990

Japanese translation published by arrangement

through Orion Literary Agency, Tokyo

わが心の故郷　アルプス南麓の村　目次

テッスィーンでの新たな出発――11
峠――18
村――21
農場――25
真昼の憩い――28
赤い家――32
ロカルノの春――35
南欧の夏の日――36
秋の森で痛飲するクリングゾル――41
南国からの冬の手紙――43
アルチェーニョ近傍で――50
家々、畑、庭の生垣――52

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

テッスィーンの教会と礼拝堂――54
小さな道――60
画家、谷間の工場を描く――73
テッスィーンの夏の夜――75
夕暮れの家々――82
湖岸――83
南国の夏――90
夏の夜のテッスィーンの森の酒場前――91
マドンナ・ドンジェロ――93
テッスィーンの聖母祭――113
夕べの歩み――121
夕方に詩人が見たもの――123
晩秋行路――131

ロカルノにて――133
イタリアを望む――139
夕べの雲――141
画家のよろこび――148
水彩画――150
暑い真昼――157
夏の終わり――158
雷雨の前の一瞬――165
秋　自然と文学――166
二月の谷の湖――173
ニーナとの再会――174
アルプス颪の吹く夜――182
田舎へ帰る――184

栗の森の五月 189
色彩の魔術 198
水彩画を描く 199
老木の死を悼む 206
谷の湖の眺め 215
対照 217
百日草 224
盛夏 231
隣人マリオ 233
赤いパヴィリオン 249
室内の散歩 251
秋になれば 259
晩夏 268

夏と秋とのあいだ――270
古い庭園――278
テッスィーンの秋の日――280
クリングゾルの夏の思い出――297
一九四四年十月――301
桃の木――303
小さな煙突掃除屋さん――308
テッスィーンの冬――317
テッスィーンへの感謝――318
一九五五年の日記から――321
朝のひととき――331
モンタニョーラの四十年――334
秋の雨――337

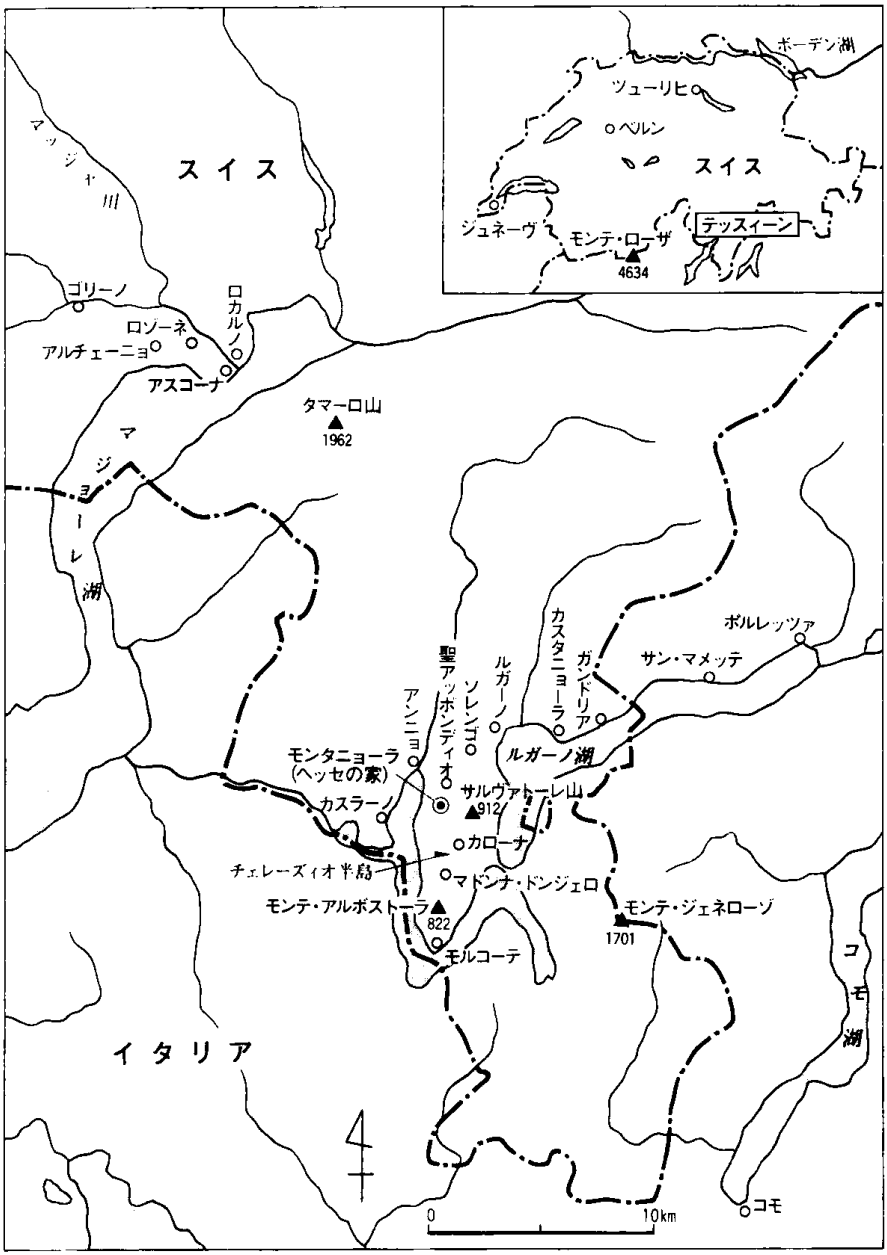
〔物語〕

南国のリゾートタウン——340
鳥——348
あるテッスィーン人の履歴書——375

テッスィーンのヘルマン・ヘッセ

「ここで生きる可能性が開けた」（フォルカー・ミヒェルス）——405
出典——432
訳者あとがき——440

スイスのテッスィーン地方



此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

テッスィーンでの新たな出発[1]

ベルンに別れを告げることは、もうつらくはなかった。倫理的に私が生きてゆける可能性は今ではもうただひとつしかないことがはっきりしていた。私の文筆活動を何よりも第一に考え、ただそれだけに専心して生き、家庭の崩壊も、重大な金銭上の心配ごとも、そのほかのどんなことも深刻に考えまいと思ったのである。それがうまく行かなければ、私はおしまいであった。

私はルガーノへ行き、二、三週間ソレンゴに滞在して住むところを探した後、モンタニョーラにカーサ・カムッツィ[2]を見つけて、一九一九年の五月にそこに移り住んだ。ベルンから私は自分の書き物机と書物だけを運ばせた。そのほかはすべて借りた家具調度で生活した。これがこれまでに私の住んだ最後の家だが、私はそこで十二年間生活した。最初の四年間は一年を通じて、それ以後は暖かい季節だけであったけれど。

この美しい風変わりな家……[3]は、私にとって非常に重要な意味をもっていた。そして多くの点で、私がそれまで所有した、あるいは住んだことのある家のなかで最も個性的で好ましい家であった。もちろん私はここでは無一物であった。またその建物全体を使っていたのではなく、

その一部にあたる四室の小さなアパートメントに、間借り人として住んでいたにすぎない。私はもはや、家と子どもたちと奉公人たちをもち、自分の犬に呼びかけ、自分の庭の手入れをする一家の主人でも父親でもなかった。今では無一物の文士であり、牛乳と米とマカロニで生き、着古しの背広を擦り切れるまで着て、秋には森からクリの実を拾ってきて夕食に代えるひとりのみすぼらしい、少々うさん臭いよそ者であった。

しかし、問題の実験は成功した。そしてさまざまなことがあって、つらい思いをしたにもかかわらず、この年月は美しく、また実り多いものであった。不安な夢から覚めたように、何年も続いた悪夢から覚めたように、私は自由を、空気を、太陽を、孤独を、仕事を満喫した。

私はこの最初の夏のあいだに相次いで『クラインとヴァーグナー』[4]と『クリングゾルの最後の夏』[5]を書いた。これによって内面の緊張も解けたので、私は続く冬のうちに『シッダールタ』を書き始めることができるほどになった。こうして私は破滅を免れた。私はもう一度元気を取り戻した。私はまだ仕事をすること、精神を集中することができた。戦争の数年は、私が半ば恐れていたにもかかわらず、精神的には私を破滅させなかった。もしもあの年月のあいだ何人かの友人が変わらず誠実に私を助けてくれなかったとしたら、私は物質的困窮に耐えて生きのび、仕事を成しとげることはできなかったであろう。ヴィンタートゥーアの友人[6]や愛するシャム人たち[7]の援助がなかったならば、そうは行かなかったであろう。そして友人として多大の援助をしてくれたのはクーノー・アミエット[8]であった。彼は私の息子ブルーノを自分の家に

引き取ってくれたのである。

このようにして私は最近の十二年間をカーサ・カムッツィに住んだ。その庭と家は、『クリングゾル』の中に、またその他の私の作品の中に出てくる。私はこの家を何十回となく絵に描き、スケッチした。そしてそのこみいった、気むずかしい形をくわしく追究した。とくに最後のふた夏は、別れを告げるために、バルコニーからも、窓からも、テラスからも、もう一度すべての眺めを絵に描き、庭の中の不思議に美しい隅々や外壁などをたくさんスケッチした。

わが宮殿（パラッツォ）はバロック様式の狩猟用城館を模倣したもので、テッスィーンのある建築家がおよそ七十五年前に気まぐれに建てたものであるが、ここには私のほかにもたくさんの間借り人が住んでいた。しかし、私以上にここに長く住んだ人は一人もいないし、おそらく私ほどこの建物を愛した（憐憫の情をこめて）人も、またここを「選んだ故郷」とした人もいないと思う。地形上の困難さを楽しそうに克服しつつ、並はずれてぜいたくで、陽気な建築欲から建てられたこの半ばいかめしく、半ば滑稽な宮殿（パラッツォ）は、見る角度によって、まったくさまざまな外観をもっているのである。

この建物の正面玄関から、大げさに、芝居がかって、堂々たる階段が下の庭へと通じていた。この庭は、いくつもの階段や、築山や、外壁をもつたくさんのテラスから成り、狭い谷底までつながっていた。そしてこの庭ではすべての南国の木々が特選の立派な見本のように古くて巨大であり、互いにもつれあって茂り、フジとクレマチスがいたるところを覆っていた。この家

はここの村からさえもほとんど完全に隠れて見えなかった。下の谷からは、ひっそりとした、木の茂った山の背の上に階段状の切り妻と、小さな塔が見えた。まるでアイヒェンドルフ[9]の短篇小説の田舎の城のようであった。

ここでも十二年のあいだに、私の生活だけでなく、建物や庭にもいろいろな変化があった。下の庭の、これまで私が見たうちでも最も大きくて、立派なハナズオウの古木は、ある秋の夜、嵐の犠牲となって倒れてしまった。その木は毎年五月の初めから六月に入ってもずっと豊かに花をつけ、秋と冬にはその赤紫色の莢果（きょうか）のためにとてもエキゾチックに見えた。私のバルコニーのすぐ前の、大きな『クリングゾル』のタイサンボクは、いつか私の留守のときに切り倒されてしまった。その木の幽霊のような、白い、巨大な花が、私の部屋の中に入り込むほどに茂っていたものである。あるとき私は長いあいだ留守にした後、春にツューリヒから帰って来ると、なんと私の出入り口のなれ親しんだ古い扉が跡形もなく消えうせていて、その場所が壁でふさがれていた。私は魔法にかけられて夢でも見ているような思いでその前に立ちつくしていた。入り口が見つからないのだ。私にはまったく知らされぬまま、少しばかり改築されていたわけである。

けれどこの家は、どのように改築されても嫌にはならなかった。それは、以前に住んだどんな家よりもはるかに私自身の家であった。私はここでは夫でも父親でもなく、ここは私だけの家であり、ここで私は大きな座礁に続く不安でつらい年月を、時には完全に絶望と思われた状

況の中で切り抜けたのであったし、ここで私は何年ものあいだこの上なく深い孤独を享受し、その孤独に苦しめられもした。私にとっては慰めのシャボン玉であるたくさんの作品や絵画も創作した。そして私は少年時代以来ほかのどんな環境でも例を見なかったほどに、この周囲のすべてのものと緊密に結ばれていた。私は感謝の気持ちを表すために、この家を頻繁に絵に描き歌で賛美した。この家が私に与え、私にとって意味したものに対して、さまざまな方法で応えてみようとしたのである。

私が、孤独の生活をずっと続けていたならば、私がもう一度人生の伴侶を見つけることがなかったならば、このカムッツィ館は、もう年老いて健康ではないひとりの人間にとって、多くの点で不便ではあったけれど、ここからまた出て行くようなことには決してならなかったであろう。私はこのおとぎ話に出てくるような家で、ひどい寒さに悩み、ほかにもいろいろと不自由を忍んできた。そのために最後の数年間は、やはりもう一度引っ越そうか、老後にもっと快適に、健康に暮らせる家を一軒買おうか、借りようか、それともいっそ建てようか、という思いが、くりかえし心に浮かんだけれど、それを一度もほんとうに真剣に考えたわけではなかった。それは願望であり思いつきであって、それ以上のものではなかったのである。

そんなとき、あのすばらしい夢のような話が生まれたのである。一九三〇年のある春の晩、私たちはツューリヒの「方舟[はこぶね]」[10]にすわって、雑談をしていた。話題は家と建築のことになり、私はときおり心に浮かぶ自分の家の希望を述べた。すると、突然友人のB[11]が私に笑いかけて、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com